別室で楊夫人心づくしの豪華な料理で乾盃、引続き忘年の宴に移り隠し芸など続出で時の過ぎるのも忘れて愉快な半日を送り八時過ぎ散会、それぞれ帰途についた。

日本芸術琵琶普絃会の例会

十二月二十一日(日)東京文京区大塚の貸席京屋で開催。門琵琶ほか弾法ー山崎錦幽▼別れの盃ー松本藷水▼城山ー内田隆章▼詩吟二題ー奈佐喜八▼白虎隊ー杉山▼鴨川の露ー佐藤旭尚▼壺坂ー金森旭弾▼山伏接待ー高田栄水▼月下の陣ー坂入晴峰▼白虎隊ー青木草水▼雪晴れー杉山旗水▼別れの緒琴ー若宮旭登ー大高源吾ー日比錦姥▼乃木将軍旅順の追憶ー長谷川錦舟▼諸弾法ー鈴木流泉。以上研修のあと忘年の宴に移り八時解散した。尚本日の出席者は十九名であった。

京都琵琶協会一月例会

一月十一日(日)昼一時平井会長宅（次号詳報）

各流派琵琶名流演奏会

一月二十四日(土)昼東京銀座ガスホール、日琵協・東京新聞社共催　（次号詳報）

松岡旭岡（乙吉）氏

昭和五十五年十二月六日老衰のため逝去、享年八十七才。

明治四十一年初代橘旭翁師に続いて二代、三代旭翁師に師事し昭和四年五月最高免状大教司を受け、爾来筑前琵琶旭会の大御所的存在を保ち主として関西各地の広範囲で子弟育成に功蹟を挙げ、終生旭会名誉会長として今日に至ったもので、老齢とは云いながら誠に惜しい方を失い全琵琶会のためにも大きな損失である。翌々八日神戸仏教会館に於ける告別式には一般人のほか遠近の多数琵琶関係者が参列して永別を惜しんだ。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

山本鶴声氏

昭和五十五年十一月二十九日脳血せんのため逝去、享年八十二才。

正派薩摩琵琶の元老で豊かな声量と弾法の妙は定評がありその教えを受けて現在第一線に活躍中の門人も多く、又師の書道も一派を成していた。告別式は十二月一日静岡の蓮永寺で営まれ多数の参列者が別れを惜しんだ。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

―（予告）―

○…京都琵琶協会二月定例会　二月一日(日)午後一時平井会長宅。

○…各流派琵琶第四回演奏会　五月三十一日(日)十時半ー十六時半京都烏丸夷川上ル京都商工会議所、主催日琵協会関西支部（有料）

きがとあ

毎年のことながらお正月の屠蘇機嫌で、ついウカウカと毎日を送っているうちに早くも酷寒二月となった●今冬は例年にない大雪で関西人のわれわれには想像もつかぬ雪害が北海道、東北地方から日本海側各地の人々をなやませている様子、心からお見舞申し上げる●京絃は別記の通り諸物価高騰に伴う印刷費や郵税の値上りで最早やどうにもならなくなり二月から会費改正に踏み切らざるを得ない結果となった●今更申し上げるまでもなく京絃はこれによって金儲けしようなどの野心は夢にも考えて居らず、只々御愛読の皆さまに喜こんで頂き、引いては琵琶界発展の一助ともなれば光栄これに過ぎないのである。と同時に琵琶を唯一の趣味、道楽とする老編集子が編集発行の仕事によって、兎もすれば老化せんとする頭脳に訓練刺激を与えてこれを防止する一つの手段として、満足しながら今後とも多少の犠牲は甘受する●ただ何分にも発行部数が少ないため自然単価高となり此の点常に憂慮している次第、よろしく御賢察をお願い申し上げる●冬来たりなば春遠からじ、あと一ケ月あまりで暖気が訪づれて来よう、お互いに無理をしないよう健康に充分留意して好きな琵琶を楽しもう。

〒569　昭和五十六年二月一日発行（非売品）
発編行者　寞
高槻市京橋一ノ二三　村水社
電話〇七二六(七三六)五一番

琵琶機関紙　京絃　第三二〇号　京絃社

建武の中興と吉野五十七年（八ばくすい）

建武の中興に際して、若冠十六才で北畠顕家は陸奥守に任ぜられた。表面は陸奥守であるが、実際は陸奥・出羽の両国を鎮完する任務を仕さどるもので、今の東北六県に当り、極めて広大な範囲の守護職であり、遠く中央から離れて王化に浴する事少なく、北條氏滅亡の直後には問題の多い地方である。顕家は最初これを辞退したが、後醍醐天皇は、

公家既に統一しぬ、文武の道、二つあるべからず。昔は皇子皇孫、または執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大将にもさされしか。今より武を兼ねて藩屏たるべし。

と仰せられ、自ら旗の銘を書いて賜わり種々の武器を下賜されたので、顕家は皇子義良親王を奉じて任地へ下った。出発の際は御前に召して勅語をたまわり、御衣と乗馬を与えられた。任地は多賀城、今の塩釜附近であるが、赴任して一年半、両国民はその威に靡きその徳に服したので、建武元年暮れには勲功の賞として従二位に叙せられたが、十七才の従二位は目ざましい事で、しかも翌年には十八才で鎮守府将軍を兼ねるに至った。

建武二年秋、足利謀叛して京を侵すや、顕家は奥羽二州の兵を率いて西上。多賀城から京都まで凡そ二百六十里、それを顕家は六万の大軍をもって二十日余りで上京し、楠木、新田、名和諸軍と協力して高氏を九州へ退散せしめた。天皇は深く喜ばれ、特に鎮守府大将軍、権中納言を与えられ、常陸・下野の二国を併せて管轄せしめられた。今で云えば東北六県に茨城・栃木の両県を加えて八県の知事を兼ね、同時に軍の最高司令官となったわけで、時に顕家は十九才であった。

やがて楠木、千種、名和の諸将相前後して討死し、官軍の形勢不利となるや陸奥にも賊軍に味方する者が出はじめ、顕家は霊山の嶮しい城に移ってこれに対抗したが、天皇から急拠上京して京都を取戻すようとの勅書に接し、延元二年八月兵を率いて出発し、途中の賊を討って翌三年五月、和泉国から京へ向おうとして不幸にも戦死した、歳は二十一才。

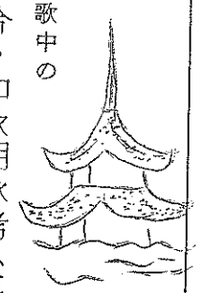
延元三年官軍の計画は、南より北畠顕家、北より新田義貞で京の賊軍を挟み討ちする予定であったようだが、顕家は五月に和泉で、同七年義貞越前で戦死し、重要な大将軍を前後して失った。朝延は皇子義良親王を再び陸奥に派遣し、輔佐役として顕家の弟顕信を従三位中将に任じ鎮守将軍とした。これは先年義良親王が陸奥太守に任ぜられ、顕家が次官として大介と呼ばれたのをそのままの姿としたのである。

一行は先づ伊勢神宮に参拝して大湊から出航したが、海上で暴風に逢い船は難破、僅かに宗長親王だけが予定通り遠江へ着かれた外は、何れも予期しない所に吹き寄せられた。即ち義良親王は顕信と共に元の伊勢へ、顕信の父親房は常陸の霞ケ関へそれぞれ標着した。義良親王は出発前既に皇太子に内定していたから、暴風のため不測にも吉野へ帰られた事は、殆んど奇蹟とさえ思われる。

北畠親房はその時四十六才。先年補導した世良親王の逝去を歎いて大納言の栄官を辞退し、出家して八年間表面に出ていなかったが、今や長男顕家は戦死し、次男顕信は任地へ下れず、楠木、名和、新田ら中興の諸将亡きあと賊の勢の盛んなるのを見て、既に出家の身でもあり年もとっているものの、慨然として賊軍討伐の指揮をとるに至ったのである。

琵琶歌中の詩吟・和歌朗詠考（五）

編集部



（琵琶歌―本能寺）

本能寺　頼山陽

本能寺溝深幾尺　吾就大事在今夕
茨粽在手併茨食　四簷梅雨天如墨
老坂西去備中道　揭鞭東指天猶早
吾敵正在本能寺　敵在備中汝能備

本能寺溝の深さ幾尺ぞ　吾が大事を就すは今夕に在り
茨粽手に在り茨を併せて食う四簷の梅雨天墨の如し　老の坂西に去れば備中の道　鞭を揭げて東を指せば天猶早し　吾が敵は正に本能寺に在り　敵は備中に在り汝能く備えよ。

（作者は通称三樹三郎、名は醇、山陽の第三子、安政六年十月七日小塚原で刑死、齢三十五）

明智光秀謀叛の原因は種々あるが、天正十年六月信長が丹波八上城主波多野秀治を亡ぼした時、光秀の母が人質として八上城に居たため一諸に殺された事や、徳川家康饗応の役を命ぜられてその準備中、急に秀吉の援軍として備中の毛利征伐を命ぜられたことなどが主因であると思われる。

「註釈」　茨を併せ食う＝天正十年六月一日京都愛宕の西坊に連歌の会を催し〝時は今天が下知る五月雨〟の句を作って粽（ちまき）を思わず包みのまま食した。四簷＝家の四方の軒。老坂＝山城沓掛から丹波の王子に至る坂道。

「大意」　本能寺の溝の深さは如何程か知らぬが、信長を討つことの大事は今夜である。そんなことを考えていたため連歌の席で茨のままの粽を食してしまった。時は六月で梅雨の空は墨を流した如く四方が暗い。六月二日の夜明けに備中にある秀吉の援軍に出発の様を装い老の坂まで来た、これから西に向えば備中への道であるが、光秀は馬に鞭をあて東方に向って指した。未だ夜明け前で、我が敵は本能寺に居る信長だ、しかし実際の敵は備中の秀吉であるから、その方も直ちに準備せよと云った。

（その準備が不充分であったため、光秀は秀吉に破られたのである。）

五絃閑話

水藤五郎

今年の夢

今年は昭和五十六年酉年です。琵琶人と称する我々にとっては、一体、どのような年になるのでしょうか。全く未知であり、それ故にこそ希望もあり、又反面不安もあると云えましょう。

本誌前号に於ける〝年頭の辞〟と題する中で植村主宰は、「琵琶楽が復活機運の徴候を近時呈しつゝあることから、遠からず往時の盛況を再現するものと専心念願している次第」と述べられているのを考えると、今年は是非そう在って欲しいと、私も思っています。

たゞ、現実はなかなか厳しいようです。往く年来る年の言葉にそって、過ぎ往きし昨年をふり返ってみれば、琵琶楽にとって、今日、並びに将来の社会状況は決して楽観出来るものではないようです。

先づ第一に挙げられるものに、小・中学生の校内暴力があります。戦後の思想価値感の急変の良し悪しを単純に決めることは出来ない乍らも、最近の傾向であるところの教師に対する畏敬の欠如は、教育に於ける教師像の問題の如何は別として、やはり是認されてよいものではないと思うのです。

先生と生徒の間柄は、云わば師弟関係であり、芸能教育を自認する我々にとって決して無関心ではいられない問題と云えましょう。

学校教育に日本音楽を取り入れることを願う我々は、今日の学校教育に起った問題に対しても敏感でなければならないはずです。

先生に対する畏敬の欠如だけに止どまらず遂には、親に対する殺人までが発生してしまいました。勿論、これは異例の事件ではありましょうが、それでもやはり傾向として、親殺しに近い暴力行為はよく事件となっています。親の恩、師の恩を説く芸能が、これ等の社会状況とどの様に対決してゆく可きかです。ただ世の中が変った〟の一語だけで事足れりとしているのが実状です。

我々が、学校で琵琶を含めた邦楽を聴いて欲しいと念じる時、その聴く側の生徒の価値感の姿に無関心であってはならない訳です。薩摩琵琶であれば、〝城山〟か〝彰義隊〟を聴かすのですが、先づこの曲の中に歌われている魂を理解できる価値感の授与を学校生徒は受けていません。生徒だけでなく、社会に於ても受けていないのです。

では、琵琶の歌に云う思想をそのまゝ取り入れると云ったのでは、歴史の流れを反対にすることになってしまい、やはり不自然です。又、仮りに、そうあったとしても、親・師に叛く人はいつの時代にもあるのですから、幾つかの事件は起ります。

では、一体、どうすればよいのか〟と云うことですが、名案はないのが現実です。又、ないからこそ、思案しなければならない訳です。琵琶の復活盛況とか往時の盛況とかは、我々にとって一面大事なことであり乍ら、反面では不可能なのです。何故ならば、琵琶楽の往時とは、明治・大正時代の琵琶流行を云うのでしょうが、それは、日清日露の戦争鼓舞の傾向に端を発していました。勿論、そこには西幸吉、吉水錦翁、そして永田錦心等の名人、大家の芸術努力があったのですが、それ以上に社会状況との適合があったことが、その隆盛を導いた原因と云えましょう。

琵琶楽がその当時のまゝの芸術姿勢で今後の盛況を期するのは、社会状況を考慮にいれての論とは思えません。前述した社会動向について考える時、それに適するものに琵琶楽の姿を変えてゆかなければなりません。

こゝで云う琵琶楽姿勢の改革とは、決して琵琶歌の説く曲趣についてだけではなくて、琵琶をとりまく周辺の全ての問題を意味しています。又一方、社会の動きについても同様です。先生や親との関係に変化が生まれた以上に、現代の若者、いや、社会人全てが、芸能に対しての感覚をその往時とは驚ろく程異にしている現実も含んでの社会状況なのです。

琵琶楽の全てを変える必要はないことは当然です。親・子・師・弟の関係が昔と変わっているからこそ、昔の事件を歌い伝えてゆくことによって、その説く理を現代以降に伝える必要があります。そのことでは琵琶の変わらぬ姿が望まれるのです。が、これには一歩誤まると、社会に適さぬものとして滅び去る運命をたどる恐れがあります。それにならぬためには、やはりその時勢に適する面も作らなければなりません。滅びるか稀少価値としての文化財になるかの選択は、芸能の側に与えられています。

今年は、社会に適するべく琵琶楽姿勢が改革されて、植村主宰の云う往時の盛況にはほど遠い乍らも、存在するべき価値ある琵琶楽として生き残ることを、心より望むのです。

日蓮聖人苦難の地　佐渡ケ島（下）

辻旭城

新潟交通のガイド白川さんの案内で、畑野から小倉峠を越えて松ケ崎へ向かった。小佐渡を横断する途中に長谷寺（ちようこうじとも呼んでいる）の古刹がある。大和の長谷寺を模したもので、可愛いい石地蔵がギッシリ並んでいる。バス岩首線長谷下車。一日の便数が少ないとのこと、今でこそ道もよくなり観光バスが走っているが、日蓮が松ケ崎から人里離れ山越えした昔の道は、容易を行路ではなかったろう。最初の適居の地新穂村の塚原に入ったのは十一月のことである。もとは死人の捨て場だったというから、荒涼とした山野であったのであろう。

日蓮の住んでいた根本寺の三昧堂の跡には戒壇塚が建てられているが、ここで「蓑うちきて夜を明かし日をくらす、夜は雪に電雷ひまなし」という生活であった。

いま建っている根本寺は、妙宣寺と共に日蓮宗佐渡三本山の一つ。戒壇、祖師堂は佐渡金山の山師味方但馬が寛永の頃築いたものと

いわれ、祖師堂の左横には味方家代々の立派な墓（五輪塔）、その近くには佐渡初代の代官河村彦左衛門の息女の墓が建っている。

妙宣寺（真野町）は通称阿仏房と呼ばれ、塚原にいる日蓮のもとに、夜毎ひそかに食物を運んだ日得（遠藤左衛門為盛）の開墓。彼はかって北面の武士として順徳院に仕え、承久三年（一二二一）承久の乱に出陣して破れ、院に供奉して佐渡へ流されて来たもので、日蓮は日得の妻千日仏に幾度びか身延山から感謝の手紙を書いている。佐度で只一つという五重塔は文政八年の建立。羽茂町出身の中川金蔵の作である。彼は後醍醐天皇の〝朝権回復〟の謀議に参画し、それが鎌倉幕府に洩れて正中二年（一三二五）佐渡へ流され、在島僅か七年で処刑された。処刑の場所は代官宮本間氏の居館のあった檀風城跡近くだった。

こんな話を島を訪れて聞いた。父の処刑の近いことを聞いた資朝の一子阿新丸は、家族にも告げずにひそかに島へ渡った。そして父に最後の別れを告げたいと、城主本間山城守に願い出たが悲願は許されず、数日後資朝が裸馬に乗せられて河原で斬られてしまった。阿新丸はある夜、激しい風雨にまぎれて居館内に忍び込み、山城守の弟本間三郎を刺して父の仇を討ったという。

当山開墓の日得、千日尼の墓は歴代住職の墓地の中にある。この寺に近く世尊寺がある。三祖国府入道、妻是日尼も日蓮に深く帰依し、妙音寺の阿仏房と国府入道は、共に幾度か食物を携えて身延の日蓮を訪ね、身の廻りの世話をしている。

佐渡配流の翌年春、日蓮の予言が北條時朝の乱となって的中したので幕府の態度も軟化し、寒風吹きすさぶ塚原よりも、温暖佳境の大佐渡山脈の山ふところの一の谷へ移された。

妙法華山妙照寺で、日蓮は一心に〝観心本尊抄〟を著作しているうちに、文永十一年（一二七四）弟子日朗が使者として鎌倉からの赦免状を持って一の谷に到着した。佐渡で二年三ケ月間流刑となって苦難の日々を送っていた日蓮は、喜んで三月十五日弟子たちと共に真浦（赤泊村）を出航、越後柏崎に向った。

日蓮が佐渡へ船出するときと、佐渡から乗船するときに〝波がえし〟に〝七へんがえし〟というお題目の伝説が残っている。中でも豊田浜（真野町）から小木に向かう日蓮との別離を込めて、信徒たちが唱えた〝七へんがえし〟といって哀調を帯びている。

老人のうた

木内順水作詞

ここに老人集まりて、老人クラブの輪をつくり、過ぎたる昔をふり返り昔話に花咲かす。

われら明治に生れ来て、大正時代に親と

寒中御見舞

錦琵琶本部

宗家

水藤五郎

まり子

大吾

〒176 東京都練馬区旭町三ノ二二ノ四
電話〇三（九三〇）四四九八番

なり、昭和も既に五十年、ひとの顔みる人もいる。

思えば永い幾年を、よくぞここまで生きて来た、嬉しいことや辛いこと、若い時代を思い出す。

天皇陛下を神として、政府の命には服従し、貴族も士族も平民も、天下大平の御代でした。

向う三軒両隣り、しっかりやろうと手をつなぎ、助けられたり助けたり、涙も笑いも分け合って。

わが家は主人（あるじ）を柱とし、祖先のつとめもおこたらず、教育勅語を身につけて、一家仲よく睦まじく。

朝は早起き夜はおそく、一銭二銭と始末して、お国のためだ身のためだ、粗食いとわず働いた。

戦争すれば勝つものと、思っていたのに負けました、負けた途端に世が変わり、明治の足では追いつかぬ。

おくれちゃならぬとふんばって、ネジリ鉢巻ぐっとしめ、これでも昔はいっぱしと、引けはとらない俺だった。

力んでみたがかなわない、義理も人情もふりむかず、自由世界をつっ走る、若い時代にゃ及ばない。

それでも今はありがたい、お国の下さるお小遣い、わがまま云わずに頂いて、出来る仕事にはげみましょう。

去年米寿のすんだ人、今年喜寿を祝う人、死んでも悔いのないように、でっかい足跡（ぜき）のこしましょう。

琵琶歌として作詞されたものではありませんが、明治、大正生まれの琵琶人の多い現在には参考となると思い了解を得て掲載しました。琵琶歌として適当に作曲し、老人ホームなどの慰問演奏にも面白いと思います。（松山市佐藤晃絃氏提供。）

1係1

〃茨木童子〃

琵琶歌「茨木」「綱館」「羅生門」などで知られる〝茨木童子〟と鬼の伝説。大阪府茨木市新庄町に〝茨木童子貌見橋〟の石碑が建てられている。

この石碑は、阪急電車茨木市駅の西方、茨木高校の近くにある。橋といっても今はその面影もなく、細い道路を巾八十cmほどの溝が横切っている。以前は溝川で橋が渡してあったが、現在はコンクリートで固め排水溝になっていて、昔の橋を想像することは出来ぬ。

『茨木市史』によれば、茨木童子の生まれた所は水尾村（今の茨木市水尾、新庄町の南方）。赤ん坊のとき茨木村（現新庄町）に捨てられていたのを近くの床屋に拾われ育てられた。長じて床屋の手伝いをしているうちに、剃刀で切った客の血をなめたがその味が忘れられず、遂にはわざと傷をつけてその血をなめるようになった。

その内に自分を異常と思うようになった童子は、ある日床屋の前の小川の橋上から水に映った自分の顔を見て、鬼の形相であることにびっくりした。そして大江山の酒呑（しゅてん）童子の元に走ってその家来となった。

また『摂陽群談』では、茨木童子は摂津国川辺郡東留松村（現尼ケ崎市）で生まれたが、生まれたときから牙が生え、髪は長く、眼には異常な光があるため一族の者が恐れて、今の茨木市あたりに捨てたのを、酒呑童子に拾われ育てられたと書いてある。

寒中御見舞

篁流詩吟・琵琶

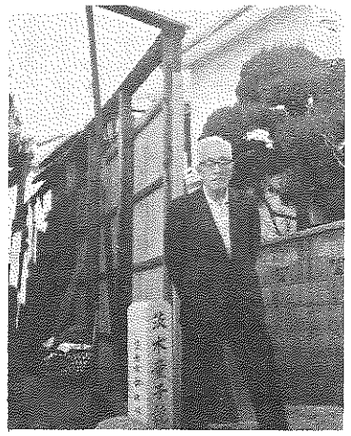
西篁会主　柿沢篁峰

〒435 浜松市安松町三三ノ四
電話（六一）三五五四番

この橋の袂の家、童子が住んでいた床屋は現在は普通の家であるが、昭和大戦前までは代々床屋であった。また、ここから東、阪急電車のガードを越えた字九頭神に櫛塚があった。童子が床屋を去ったあと、残していった櫛を、祟りを恐れて埋めたところだというが、今は残っていない。

伝えられるところによると、昔、その床屋には不吉なことが必ず起こった。それから後、この店を継ぐ者は必ずお祓いをしてから入居した。櫛塚についてもそこに植えてあったくぬぎの木を切った植木職人は、突然震えがきて急死したという。

昭和五十年三月、地元の有志によって〝茨木童子貌見橋〟と刻んだ御影石の碑が建てられた。昔は奇麗な水が流れていたというが、今では姿を映せるような流れを作ることも、橋を作ることも出来ないから、童子の伝説を残すにはこれしかなかろう。



昔の橋があった位置ということからか、道路から這入った細い横道の民家の軒下に高さ八十五㎝の小さな石碑で、注意しないと見落してしまう。

（写真、碑の傍らに立てるは筆者。なお石碑から十mのところに片桐且元の旧邸宅跡が空地のまま残されている）。

（植村記）。

京都本妙寺　義士祭琵琶奉納

十二月十四日(日)本妙寺恒例の義士祭が催された。寒い冬型とはいえ、おだやかな晴れ間の天気でお庭や本堂には冬の陽射しがさし込んでいる。

つぎつぎ参拝者が続き、昼前には平井春嶺夫妻が琵琶を携えて来られ、山岡旭清女史も桜井旭富氏も琵琶を持参された。

お座敷で「打入りそば」のご接待を受け、また本堂の紅白幕の中では「お薄」を頂いた。

義士安置所のお堂へと詣ず。お堂には四十七士のいで立ち姿の木像が安置され、まず香を焼いて拝礼す。壁面には古文書など数多く展観され、その筆力と墨色の美に敬服す。

奉納は山岡女史の「大高源吾」をトップに、むしろ静寂の中に豊かな音量と琵琶の音が響きわたり、二百八十年前の元禄の昔が偲ばる。

続いて平井春嶺氏の「雪晴れ」は妙えなる弾法により、義士の本懐がほうふつと浮かび高潮に到った。

桜井氏の「別れの盃」張りある調子に感情が加わり、義士追悼の感が深い。

三氏の奉奏は参拝者に深い感動を与えた。お上人さま、世話方々にお礼を述べ、義士祭参加の喜びと有難さを感ずることを得た。

五五、一二、一五（鴨水記）

紀伊勝浦　串本遊好（ゆこう）記

日本琵琶楽協会関西支部は、昨年に続き、第二回の懇親旅行を南紀の勝浦、串本行が、多数決にて選ばれたので、昭和五十五年師走十九、二十の両日に決行した。

参加者は、山崎旭萃、三浦蓮水、柴田旭堂、田中旭昇、富樫旭桂、浜本旭好、中島旭穂、川上琵水、伊勢谷安江、平井春嶺夫妻の十一氏で、世話役は伊勢谷、富樫両女史が献身これに当った。

十九日一〇・〇〇天王寺駅発の特急車に乗車した一行は、和やかムード一杯で談笑、一三・五二紀伊勝浦駅着、二〇分程待って那智山観光の周遊バスに乗車、約四〇分で西国三十三所札所第一番の那智観音参詣口に到着、石段をエッチラ、オッチラ登り、やっと青岸

渡寺に着き、額の汗を吹き消す涼風に生き返った心地で、坐像、如意輪観世音菩薩に参詣、それぞれ冥目して祈願するは、芸道上達か、家内安全か、将又交通無事故か。

ふだらくや岸うつ波はみくまのの

那智の御山にひびく滝つ瀬

那智山中には、一の滝・二の滝・三の滝・陰陽の滝・弁の滝・松尾の滝など四十八滝あり、最も有名なものが一番下にある一の滝であるとのことだ。この滝は直下一三〇m、幅は落口で一二m余、滝壺は江戸時代の中ごろ山中の大洪水と山崩れで埋まって、現在は深さ約二mとのことである。

那智滝の真下に飛滝神社があり、この滝を御神体としている。滝の水はそこから、文覚上人荒行の滝として知られている文覚の滝に落ちている。

一行は青岸渡寺の隣りにある熊野大社に参拝後、一の滝の飛滝神社に参拝し、勝浦港に帰り、出迎えの船で今夜の宿泊所、浦島温泉に着き旅装をといた。亡帰洞と称す岩窟温泉にて旅の疲れを慰やし、海の幸を御馳走になり寝に着いた。

翌二十日も快晴にめぐまれ、観光バスにて潮岬黒潮ラインを廻り、途中、あしかの曲芸、水族館、熱帯植物園等を観光、串本の橋杭岩で少憩後潮岬の燈台を見て、串本駅発の特急に乗車、一八、三〇天王寺駅に着、解散したが、今回も両日共天候に恵まれ、終始和気靄々裡に旅程を終え、親交の実を挙げ大成功にて終った。

（A・B・C生）

壺坂寺盲人老人ホームで慰問琵琶会

十一月十九日(日)昼大阪琵琶同好会協賛。君が代ー会員一同▼青葉の笛ー浜崎▼城山ー西尾▼赤垣源蔵ー馬所▼本能寺ー矢野旭信▼大楠公ー朽木旭明▼荒城月夜ー別所、鈴木、青柳▼衣川ー辻旭城▼川中島ー田中歡水▼菊水の旗ー作花旭友▼二〇三高地ー奥村旭美▼乃木将軍鹿島詣ー石橋旭嶺▼岸壁の母ー天津八千代。外に詩吟、剣舞数番。

蓮水会の忘年会

十二月十四日(日)昼蓮水会・一水会神戸支部合同の主記が西宮市の三浦会長宅で開催され会員十三名出席、楊光子女史の〝後夜聞伝法僧鳥〟をはじめ十氏の詩吟朗詠のあと琵琶演奏に移り毋常盤ー高原柳水▼白虎隊ー田中珠水▼月下の陣ー吉田秋水▼別れの盃ー木の宮梅水▼政岡ー滝沢花水▼重衡ー田村魁水▼扇の的ー楊嶽水▼詩吟一題ー会主三浦蓮水以上演奏。尚三重県知事夫人の山崎蘭水女史が一年半ぶりに来訪臨席され、又会員吉山瞳水嬢が去る十一月結婚されたのを祝し乾盃のあと色々余興続出、十二分の歓をつくして散会。

大阪の義士祭に琵琶献奏

十二月十四日(日)朝十時少年達によって大阪吉祥寺から同区役所まで元禄快挙の義士討入行列があり大阪琵琶同好会が之に協賛して同日吉祥寺の義士墓前に琵琶を献奏した。赤垣源蔵ー米原、島津▼大高源吾ー作花旭友▼松の廊下ー辻旭城▼義士本懐ー石橋旭嶺▼山科の別れー田中歡水▼神崎与五郎ー中島旭穂。

京都琵琶協会の十二月例会

十二月二十一日(日)昼西宮市松園町の会員楊嶽水氏宅で開催。楊嶽水、馬場鴨水、田中歡水、梅原旭濤、山岡旭清、牧南水、桜井旭富木下皇水、平井春嶺夫妻、植村寞水各会員の外三浦蓮水女史が来賓臨席され、しばし雑談のあと演奏に移り別れの盃ー木下▼弁の内侍ー平井▼曲垣平九郎ー桜井▼山科の別れー田中▼田村邸ー馬場▼西郷隆盛ー牧▼扇の的ー楊▼短篇石童丸ー植村。以上研修演奏を終り

会費値上げについてお願い

京紘会費は昭和五十一年二月以来現在のまま今日に至りましたが、この間諸物価の高騰に伴って印刷費は三回値上りし、また郵税も改正されましたため遂に犠牲の極限保持が不可能となりましたので、誠に不本意ながら二月から年額二千五百円（送料共）に改正させて頂きます。事情御賢察御了承の上今後ともよろしく御願い申し上げます。

昭和五十六年一月　京紘社